

展示記録

「愛知県陶磁美術館コレクション 中国やきもの 7000 年の旅 —大山崎山荘でめぐる陶磁器ヒストリー—

田畑 潤

(愛知県陶磁美術館 主任学芸員)

はじめに

愛知県陶磁美術館は長寿命化改修工事のため、2023年6月19日(月)から2025年3月31日(月)まで休館としていた。休館期間中に当館が所蔵するコレクションを活用するという方針から、他の美術館・博物館と連携した展示活動(出張展示)を行ってきた。

本稿は、令和6年度の出張展示の一つであり、アサヒグループ大山崎山荘美術館で開催された「愛知県陶磁美術館コレクション 中国やきもの 7000年の旅—大山崎山荘でめぐる陶磁器ヒストリー」の展示構成及び出展した作品の解説を再構成したものである。「はじめに」、「展示構成について」、「おわりに」は研究紀要の通常仕様である「だ・である調」で記載する。展覧会概要以下、実際に展覧会で掲示した文章を記載するため、「です・ます調」に使い分けている。

なお、展覧会の主催はアサヒグループ大山崎山荘美術館であり、当館は特別協力という形で開催したものである。開催にあたり、同館学芸員の野崎英美子氏と出展作品・展示構成・イベント等を企画・調整したものであり、展示デザインは株式会社 Studio Sawna にご協力をいただいた。

1. 展覧会概要

愛知県陶磁美術館のコレクション約80点により、中国新石器時代から清朝にいたるまで7000年に及ぶ悠久の中国陶磁の歴史を概観します。神秘的な土器の世界、副葬品として用いられた多彩色の器や日常の世界を再現する建築明器、世界に影響を与えた青花や、五彩をはじめとする数多くの技法などを、中国各地の窯の代表作品を通じて紹介します。「シルクロードを行き交う砂漠の舟」「蓋のつまみにゆるキャラ獅子」といった、各作品の特徴を捉えたユニークなキャッチフレーズが、作品鑑賞をより一層楽しく演出します。約100年前に建てられた大山崎山荘の建築、室内の中国古代の意匠と、絢爛たる中国陶磁の共演も見どころです。

2. 展示構成について

アサヒグループ大山崎山荘美術館の展示は、会場入口となる本館1階廊下の展示ケースに展覧会の象徴的な作品を展示することが多い。大山崎山荘は加賀正太郎(1888~1954)が、イギリスのウィンザー城を訪れた際に眺めたテムズ川の流れの記憶をもとに、木津、宇治、桂の三川が合流する大山崎に建てた別荘であり、イギリスのチューダー・ゴシック

様式に特徴的な木骨を見せるハーフティンバー方式をとり入れた洋風建築が特徴である。このことから、黒地素三彩四季花図方瓶（作品 No.1）を展示することで、欧米の中国陶磁収集家が自身の邸宅に飾るイメージを象徴するものとして採用したものである（図1）。



図1：会場入口 黒地素三彩四季花図方瓶

「第1章 新石器時代から初期王朝時代 原始の多彩なやきもの」及び「第2章 戦国時代から漢時代 墓におさめられた死者への思い」は、本館1階の山本記念展示室を会場とした（図2）。同室の暖炉上部には、中国の後漢時代に墳墓を飾った画像石、暖炉脇には画像磚が組みこまれているため、特に第2章の作品との親和性が高く、展示効果が高いものとなった。新石器時代のやきものとして、はじめに展示した紅陶尖底双耳瓶（作品 No.2）は、中国陶磁史の中で技術的・芸術的画期となる、今から7000年前の仰韶文化のものである。技術的には最初期の土器窯が確認され、芸術的には同文化を象徴する彩陶が生まれており、前時代から大きく発展することとなった。この土器をはじめりとして、清王朝までたどる7000年をキーワードとし、展覧会タイトルである「中国やきもの7000年の旅」がスタートする。



図2：第1章・第2章 山本記念展示室

展示室に備え付けの棚型ケースには高さに応じた作品を展示することで、欧米の中国陶磁収集家の邸宅にコレクションを飾るイメージを演出するとともに、ガラスとケース内の作品の距離が近いこともあり、間近に鑑賞することが可能となり、没入感が高い展示となった。室内中央にはのぞき型の展示ケースが固定され、ケース内に展示可能な作品は小型のものに限られるという条件であったため、小型の陶磁作品のほか、玉器コレクション（作品 No. 9～13）を展示することで、鑑賞のバランスと流れを損なわずに構成することができた。特に、漢時代の建築明器（作品 No. 16～19）は、同時代の什器や情景をミニチュア化したものであり、のぞき込んで細部まで鑑賞することで作品の特徴を示すことをねらった。

山本記念展示室を一周し、廊下を隔てて「第3章 三国時代から隋時代 うわぐすり発展の兆し」と題した展示室1に進む。同展示室には壁側の大型展示ケースと、室内中央の楕円形のぞき型ケースが固定されている。大型展示ケースには壺・瓶形の高さのある作品を展示し、鑑賞の手助けとしてケース内背景に章解説と年表、対応作品の大型パネルを設置した（図3）。のぞき型ケースには小さな杯・碗などの小器を展示することで、作品大小のバランスと多種さを示すことができた。同展示室は窓の外に池が面しており、カットガラスを通して自然光が入るため、初期の白磁や青磁といった色調が比較的不安定で作品により細やかな違いがある点が、視覚的に柔らかく表現されるという効果もあった。



図3：展示室1 大型展示ケース

展示室1からガラス張りの通路を抜けて、山手館へと進む。洋風建築の山荘とは対照的に、山手館は箱形で構成された展示室は展覧会ごとに様相を変える。「第4章 唐時代から宋・元時代 世界に広がる中国のやきもの」では、導入部を唐三彩、中盤に白磁・青磁、後半には各地の窯の作品を展示した。唐三彩は貴族の墓の副葬品であるため、導入部は唐時代の墓をイメージした空間づくりを行った。山手館の特徴として、出入り口の自動扉からは中が見えない仕様になっているため、鑑賞者が扉を開けた目の前に三彩武官俑（作品 No. 37）が出現するよう展示した。実際の唐時代の墓において、武官俑や鎮墓獣が墓室の門

扉前に墓を守護するように配置されていることから着想した構成である。また、三彩駱駝（作品 No. 38）の持つリアリティさと迫力を最大限に引き出すため、露出展示とし 360 度極めて近い距離で鑑賞できるよう演出した（図 4）。導入部の唐三彩が副葬品であるのに対し、中盤の白磁・青磁は唐時代から宋時代にかけて実際に使用されたり、国内外に輸出されたりした作品である。そのため、明るく開けた空間を作り当時の市街が想像されるイメージとともに作品を展示することとした（図 5）。また、越州窯・耀州窯・龍泉窯の作品は、同一ケースに展示することで異なる青磁の釉調が比較できるように展示した。そして、後半は展示ケースを区分けする形で配置することで各地の窯の作品を紹介した。中国各地の異なる気風の作品を一堂に展開させることで、広大な中国の多様性を示した（図 6）。



図 4：唐三彩 山手館



図 5：白磁・青磁 山手館



図6：各地の窯 山手館

山荘に戻り、2階へと進み、「第5章 明・清時代のやきもの 青花・五彩と文人趣味」の展示に向かう。2階の展示室3では、大型の壺・瓶・盤（大皿）を中心とした構成で、景德鎮窯の青花・五彩と漳州窯の作品で埋め尽くすよう展示した（図7）。中国国外、特に日本の茶人や数寄者に好まれた作品が備え付けの棚形ケースにおさまり、間近に鑑賞できる迫力のあるものとなった。一方、最後の展示室4では「文人趣味と煎茶」と題し煎茶に関わる作品と、「手のひらの中国趣味」として小型の作品を紹介した（図8）。展示室3の大型作品と対比させるねらいと、鑑賞の最後に一息ついて心やすまるような空間とし、2階奥の喫茶室への誘いを兼ねさせた。



図7：景德鎮窯の青花・五彩 展示室3



図8：手のひらの中国趣味（左）文人趣味と煎茶（右） 展示室4

以下、展示で用いた作品解説・章解説について掲載する¹。アサヒグループ大山崎山荘美術館と愛知県陶磁美術館では来館者層が異なるため、中国陶磁を鑑賞する初心者にも理解ができるよう、中国史及び陶芸に関する専門用語を極力用いないよう記述することとした。

さらに、作品個々のキャプションに一言キャッチコピーを添えることで²、中国陶磁に馴染みのない鑑賞者にも親しみを持っていただく工夫とした。作品解説の行下 URL は、2025 年 4 月 1 日（火）から運用開始する愛知県陶磁美術館の収蔵品検索エンジン「愛陶オンラインミュージアム」の作品解説である。本展覧会の解説の違いをあわせて参照されたい。

3. 作品解説・章解説

1. 黒地素三彩四季花図方瓶 景德鎮窯 清時代（17～18 世紀）

「一つの器に四季の花」：四つの面に牡丹、蓮、菊、梅の四季の花図が描かれています。欧米ではかつて、この図案の梅がサンザシだと思われていました。そのため本作のような器は、サンザシの英語名「Hawthorn」を取って「ブラック・ホーソン」と呼ばれます。欧米のコレクターも邸宅にこのような器を飾って、中国のやきものと四季の花を愛でていたことでしょう。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4550

第 1 章 新石器時代から初期王朝時代 原始の多彩なやきもの

東アジアでは 1 万年以上前からやきものがあつたことがわかっています。中国の新石器時代のやきものはさまざまな地域で作られ、技術的にも芸術的にも、どんどん発展してゆきます。

紀元前 5000 年頃の仰韶文化では、土器の表面に色をつけて焼いた彩陶（彩文土器）が作られていましたが、このころにはすでに窯の中で 1000℃近い温度で焼く技術があり、土器は硬くじょうぶにできていました。

やきもののかたちや文様などには、当時の自然崇拜やトーテム信仰（※ある特定の動植物をそれぞれの部族・集団の祖先や神としてまつる考え方）が深くかかわっています。また、時代が進み新石器時代の後半になると、集団に有力者があらわれ、その人を象徴する特別なやきものが作られるようにもなります。

中国で最初の王朝とされる夏王朝は、黄河中流域におこつたと考えられています。続く殷（商）・周王朝とあわせた「三代」とよばれる初期王朝時代には、高度な技術による複雑なかたちと美しさをもつ青銅器がこの地域を中心に作られ、やきものにも影響を与えました。

2. 紅陶尖底双耳瓶 黄河中流域 新石器時代中期・仰韶文化半波類型（紀元前 5000～紀元前 4000 年頃）

「おしゃれで実用的」：古代ギリシャローマで液体を入れた器アンフォラに似ていますが、本作の方が 2000 年以上古いものです。瓶の両側の耳に縄を通して川に投げ入れると、浮力によって瓶の口が自然と倒れ、水が中に入ります。ある程度たまると、瓶が自動的に上を向いて沈み、水をいっぱいに入れて引きあげることができます。使いやすさと美しさを兼

ね備えたデザインです。

3. 白陶鬶 黄河下流域 新石器時代後期・大汶口文化（紀元前 3000 年～紀元前 2500 年）
「酒つぐ器は権力者のあかし」：三本足とくちばしのような注ぎ口、取っ手が付いた「鬶」という器で、白い粘土を焼いて作られています。大汶口文化に特徴的なもので、権力者の墓の副葬品には必ずおさめられました。身分の高い者から下の者へ酒をつぐという、中国ならではの酒の飲み方がすでにはじまっていたと考えられます。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4096

4. 彩陶双耳壺 西北部 初期王朝時代・辛店文化（紀元前 16～紀元前 11 世紀頃）
「シンボルマークはヒツジ」：底には黒い煤のあとが見られるため、料理をするのに使ったのかも知れません。褐色と黒で描かれた胴部の文様は、ヒツジの角をイメージしており「羊角文」や「羊頭文」とよばれます。古代中国の西方に住み、ヒツジを聖なる動物と考えていた民族「羌人」に関連したものだと考えられます。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4366

5. 馬鞍形口双耳壺 西北部 初期王朝時代・寺窪文化（紀元前 14～紀元前 7 世紀頃）
「馬とは関係ありません」：正面から見たときの口のカーブがウマの鞍に似ているため「馬鞍形口」と呼ばれる、左右に耳のついた平たい壺です。文様をつけずに磨いた表面の胴部には、煤のあとが残っています。古代中国西方にいた遊牧民族である羌人による寺窪文化でよく見られる土器です。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=9256

6. 黒皮陶双鼻壺 長江下流域 新石器時代後期・良渚文化（紀元前 3300～紀元前 2250 年頃）

「玉のような質感の土器」：縁の左右の「鼻」（縦穴のついた小突起）と、ふくらんだ胴部が特徴的な壺です。薄手で灰黒色に磨かれた表面の状態から「黒皮陶」とよばれます。やきものですが、良渚文化を代表する玉器を連想させます。良渚文化の遺跡からは、城壁のある集落や祭壇、たくさんの玉器が一緒におさめられた墓地群が発見されています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=15346

7. 卵殻黒陶単耳壺 黄河下流域 新石器時代後期・龍山文化（紀元前 2500～紀元前 2000 年頃）

「触ると割れそう」：ろくろを使って卵の殻のように薄く精密に作られていることから、「卵殻黒陶」とよばれます。黒光りしているのは、窯の中の酸素の量を少なくして炭素を吸着させる方法で焼き、磨いているためです。日用品ではなく、比較的身分の高い人物の墓に

一緒におさめられました。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=9270

8. 灰陶鬲 黄河中流域 西周時代後期（紀元前9～紀元前8世紀）

「携帯型炊飯器」：「鬲」という漢字は、釜にふくらんだ三本足が付いた器を真横から見た形をあらわします。三本足の上にフリルのような飾りがついています。これは青銅器の装飾にまねしたものです。「鬲」は新石器時代から初期王朝時代にかけて、穀類の煮炊きや蒸し器として日常的に用いられていました。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4461

玉器

美しい色や光沢をもつ石（玉）で作られた工芸品を玉器といいます。中国では今から7000年以上前に生まれ、新石器時代後期には高度な技術が使われるようになりました。長江下流域の良渚文化で作られた玉器は、荘厳で神秘的な美しさを持ち、祭りに用いられ、権力者の墓におさめられたりしていました。

つづく初期王朝時代では、王朝が玉の素材の収集と選別を行うことで、質のよいものが作られるようになりました。前の時代と同じく日常で使われるものではなく、権力者に関係したもので、当時の階級制度を象徴する役割があったと考えられます。

秦漢時代には国家が統一され、西方との交流が盛んになります。技術の進歩と、西方から新たな素材がもたらされたことで、さまざまな玉器が作られるようになり、より身近な装飾品などとしてもちいられるようになりました。

9. 石斧 出土地不詳 新石器時代後期（紀元前3300～紀元前2000年頃）

「権力者は斧を振る」：暗い灰色の硬い石によって作られ、表面はていねいに磨かれています。刃の部分は両側から研ぎ出されて鋭く尖り、穴は両側から削っていくことで貫通させています。石斧とは新石器時代の工具の一種です。ただ本作は、実際に木などを切り倒すための斧ではなく、権力者の武器、または儀式用のものだったと考えられます。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=8694

10. 玉璋 出土地不詳 二里头文化期（紀元前21～紀元前16世紀頃）

「聖徳太子の持っているアレの元ネタ？」：内側にカーブした刃にでこぼこの飾りがついた柄をもつ玉器を「璋」とよびます。殷時代にかけて中国全土に広がっていた特徴的なものの一つで、山を神として祭る儀礼に使われたと考えられます。黒褐色の玉の表面には、ところどころ褐色のまだら模様があり、刃は表側からだけ研ぎ出されていて、平たい形をしています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=8703

11. 玉魚形飾 出土地不詳 西周時代（紀元前 11～紀元前 8 世紀頃）

「棺桶を飾るサカナジュエリー」：部分的に白いまだら模様のある深緑色の玉の両面に、魚の目やエラ、ヒレなどを刻んであらわしています。魚の口の穴にひもを通して、人が腰につり下げたり、あるいは棺を飾ったりするものだったと思われます。本作に刻まれた溝の一部には、墓におさめた時についたと思われる朱が残っています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=8715

12. 玉獣面穀文璧 出土地不詳 戦国～前漢時代（紀元前 5～紀元前 1 世紀頃）

「完璧の「璧」」：玉璧は、王など有力者の棺の中からも大量に見つかっており、権威を象徴するものだったと考えられます。中国の戦国時代、ある有能な家来が、「和氏の璧³」とよばれる宝物を敵国から傷つけず無事に持ち帰ったという故事から、「完璧（璧を完うする）」という語が生まれました。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=8730

13. 玉獣首帯鉤 出土地不詳 戦国～前漢時代（紀元前 5～紀元前 1 世紀頃）

「ベルトのバックルは戦士のたしなみ」：「帯鉤」とはベルトのバックル（フック）です。本作はベルトをかける部分が、ウマのような獣の頭の形になっています。もとは薄青緑色でしたが、経年変化で変色しました。秦の始皇帝（※中国全土を始めて統一した。彼の墓には、大量の兵士やウマの形のやきものがおさめられた）の墓と一緒におさめられていたやきもので作られた戦士も、同じ形のバックルをつけています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=8736

第 2 章 戦国時代から漢時代 墓におさめられた死者への思い

春秋・戦国時代は王朝の力がおとろえ、各地の有力者による争いが絶えない時代でしたが、それぞれの地域間での文化交流も盛んになりました。殷・西周時代に主流だった青銅器があまり作られなくなった代わりに、青銅器の形や輝きを金属ではなくやきもので表現した「原始青磁」が発展しました。

漢時代のやきものの特徴は、死後の世界の考え方と深い関係があります。死んだ人が生きているときと同じように暮らせるようにと、日用品などをかたどったやきもの（明器）が、墓におさめられました。とくに、建物や家の中の設備、農耕や畜産の場面をかたどったものは、「建築明器」とよべます。これらのやきものからは、当時の人びとの生活のようすも知ることができます。また、土器の表面に色をつけた「加彩陶」や、鉛の入った釉薬をかけて焼き直すことで緑や褐色になった「鉛釉陶」があらわれます。

14. 加彩女子俑 華北 前漢時代前期（紀元前 2 世紀）

「2000 年前の侍女スタイル」：「俑」は鮮やかに色をつけた人形の副葬品（※死者と一緒に

埋葬する品物)で、死後の世界で主人の世話をするようにと、墓におさめられました。この女性は髪をセンター分けにして、後ろで一つに束ねています。陶磁のファッションを知ることのできる貴重な資料ですが、本作の色彩は剥落して、ところどころに残るのみです。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4097

15. 原始青磁鉦 華南 戦国時代(紀元前5～紀元前3世紀)

「叩けない打楽器」:「鉦」は青銅で作られた打楽器のことで、柄を持ち木槌でたたいて音を出します。古くは殷時代の後期に作られ、サイズ違いのもので音階をかなで、祭りや雨乞いなどで使用されたと考えられます。本作品はやきもので作った代替品で、貴族の墓におさめるためのものと思われます。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3919

16. 灰陶竈 華北 後漢時代(1～2世紀)

「死後の世界でも温かい食事を」:焚口の横には炊事をする人と大壺が、上面には魚やキノコなどの食材や調理器具が型押しであらわされた竈のミニチュアです。コンロは三つあり、とり外し可能な鍋もセットになっています。墓の主人が死後も生前と同じように生活することができるようにという願いを込めて作られた建築明器です。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4179

17. 緑釉爐 華北 後漢時代(1～2世紀)

「焼いている食材は〇〇」:深い受けの底に燃料を置き、上に食材の串を乗せて焼くコンロのミニチュアです。本作でやかれているのはなんと、セミです。セミは地中から出て飛び立ち、また再生するかのように生まれ出ることから、古代中国で生命の象徴とされました。貴族の副葬品に数多くみられるモチーフです。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4183

18. 緑釉作坊 華北 後漢時代(1～2世紀)

「ノスタルジック脱穀」:「作坊」はものづくりの場所のことです。建築明器ではものづくりのさまざまな場面が作られました。本作では、足踏み式の唐臼と円筒形のひき臼がある作業場があらわされます。杵を踏んで穀物をつくる人の前には、おこぼれをついばむ二羽の鳥と、寝そべって作業を見つめるイヌが一匹。のどかな風景が感じとれます。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4156

19. 緑釉羊圈 華北 後漢時代(1～2世紀)

「ヒツジは「美」と「吉祥」のシンボル」:中国の北方でヒツジは、ブタやウシ、ウマと同じく大切な家畜です。建築明器にはさまざまな家畜があらわされ、当時の暮らしがわかり

ます。本作では、階段がついた囲いの中にいるヒツジの交尾を羊飼いが眺めています。こうした情景は、豊かな実りや繁栄の象徴として作られました。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4162

20. 緑釉楼閣 華北 後漢時代 (1~2世紀)

「2000年前のタワーマンション」：三層の楼閣（中国の高い建物）で、上下に分割して作られています。中庭があり、瓦でおおわれた屋根の四隅には葉形の飾りが付けられるなど、当時の建築スタイルがうかがえます。屋根のてっぺんには、シャチホコ形の飾りの間に鳥がいて、下の窓からは石弓を構える人たちが見えます。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4140

原始青磁

中国では初期王朝時代にはすでに、釉薬をかけて焼く「原始青磁」とよばれるやきものが作られており、青銅器の代わりに使われることもありました。私たちが目にする中国古代の青銅器は、サビに覆われ黒ずんだ色をしています。当時は黄金に近い色でした。青銅器をまねて作られた原始青磁も、金色に近いものから青みを帯びたものまで見られます。

21. 原始青磁印文尊 華南 戦国時代 (紀元前5~紀元前3世紀)

「金に輝く青銅器を模した酒壺」：「尊」の字は、香り立つ酒の入った壺を両手で神に捧げる形がもととなっており、酒壺や酒器をあらわしています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3806

22. 原始青磁鼎 華南 戦国時代 (紀元前5~紀元前3世紀)

「古代中国のステータスシンボル」：「鼎」は、三本足で鍋形の胴部に二つの耳がつく容器をさし、肉や魚類を煮込むため火にかけるものです。もともとは両耳に棒を渡してかっいで運び、祭祀（神や祖先をまつる儀式）での祭器として使われていました。王権の象徴だったと考えられ、身分によって所有できる数も決まっています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=9200

加彩陶・鉛釉陶

灰色の土器に色をぬって文様を描いたものを「加彩陶」とよびます。漢時代の貴族の墓から数多く見つかっていて、墓におさめるために作られた明器だったと考えられます。緑や褐色を表現する「鉛釉陶」も、漢時代のやきものの多様性をあらわす技術の一つです。

23. 灰陶加彩雲気文鍾 華北 前漢時代 (紀元前3世紀~紀元後1世紀)

「死者と生者の区別を明るくする器」：祭祀用の青銅器をまねた「鍾」とよばれる大形の壺

です。赤・白・緑・紫などの絵具で、雲や大気のようなすをあらわす雲気文がダイナミックに描かれています。色彩が少し剥落していますが、ほぼオリジナルの状態です。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3794

24. 緑褐釉温酒尊 華北 漢時代（紀元前1世紀～紀元後1世紀）

「神仙世界へ誘う酒壺」：副葬用の明器で、胴部の浮彫やふたの山の形は、神や仙人が住む世界をあらわしていると考えられています。器の足は子グマを抱いたクマの形をしています。邪気を追いはらうとされたクマは信仰の対象であり、漢時代には器や道具の足のデザインによく使われました。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3795

第3章 三国時代から隋時代 うわぐすり発展の兆し

本章では、中国でさまざまな地域の文化や技術がまじりあいはじめた時代に生まれた、初期の「青磁」や「白磁」など、釉薬（「うわぐすり」ともいいます）をかけるなどして新しい色彩を表現したやきものをご紹介します。

三国時代から300年ほどの間は政権がたびたび替わり、中国が史上もっとも混乱していた時代でした。この間、北方にいた民族がやってきて中国に国をつくったことで、これまでの王朝で栄えていたものとは異なる文化が伝わります。また、この時代に広く流行した仏教美術も、やきもののかたちや文様に大きな影響を与えました。

中国南方の華南地域では、鉄分を含んだ釉薬をかけて焼くことで青みがかかった色になる「青磁」が多く作られるようになります。これらの姿かたちには、西方のササン朝ペルシア（※現在のイランにあった王朝。ギリシャ・ローマやインドの影響を受けた独特の文化をもっていた）からの影響もみられ、遠い地域との国際的な交流があったことがわかります。一方、中国北方の華北地域で、鉄分などの不純物が少ない「白磁」が作れるようになったのは、画期的なことでした。青磁・白磁はのちに、高い技術が用いられた中国を代表するやきものへと発展してゆきます。

中国全土を統一した隋の2番目の皇帝・煬帝は、黄河を利用して首都・長安と中国各地とを結ぶ大運河を建設し、中国南北の交流を大きく促進させます。そのおかげで各地のやきものの技術や芸術性がお互いに作用しあい、のちに多種多様なやきものを手がける窯があちこちに誕生するきっかけとなりました。

25. 青磁神亭壺 越州窯 西晋時代（3世紀）

「神様の動物園」：壺の上に楼閣がそびえ、その上空に鳥たちが集います。楼閣の下部には楽人（※音楽を演奏する仕事の人）と、イノシシ、猟犬、サルなどの陸上生物、壺の胴部にはカメ、カニ、ヘビ、サンショウウオなど水辺の生物がいます。持ち主を死後、神仙（※不老不死の仙人）にしてくれる「神亭壺」、または、豊穡の象徴の「穀倉壺（※穀物の蔵）」

とよばれます。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3807

26. 青磁刻花花文洗 越州窯系 西晋時代 (3~4世紀)

「存在感のある洗面鉢」：つばのような縁がついた浅い鉢で、水を張って使うので「洗」とよばれています。全体に同心円状に線が刻まれ、縁の上と内側では、波形の線も組み合わせられています。釉薬は底に届くまで全面に掛けられており、底の裏側には目跡（器を重ねて焼いた際の跡）が残っています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4268

27. 青磁褐彩蛙形水盂 越州窯 西晋時代 (3~4世紀)

「思うに水盂の中から、一滴の水を蛙の背に落したるを」：水盂とは、硯にさすための水を入れる器です。平たい壺形の胴部に、カエルの頭と手足、立体的な花があらわされ、表面は全体にスタンプによる花模様が見られます。口の部分とカエルの目は、褐色に色づけされています。キャッチコピーは、夏目漱石『草枕』の一節（※「(…) 思うに水盂の中から、一滴の水を銀杓にて、蜘蛛の背に落したるを、(…)」）をもじったものです。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4378

28. 青磁鶏舎 華北 西晋時代 (3~4世紀)

「窓から顔を出すのは賢いニワトリ?」：ろくろで作った筒を横に倒し、窓や瓦屋根の細部をととのえると、小屋の完成です。壁の一つがふくらんでいて、焼きときに空気を抜くためと思われる穴が空いています。窓から顔を出す二羽が、晋の宋処宗が飼っていたという、言葉のわかるニワトリ（※宋処宗が書斎の窓に飼っていたニワトリが言葉を話せるようになり、彼の勉強を助けてくれたという故事⁴⁾）が思い起されます。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4190

29. 黒釉天鷄壺 徳清窯 東晋時代 (4~5世紀)

「ニワトリ型ポット」：器の肩の部分にニワトリの頭がついた壺です。はるか東南のかなたに大きな樹があり、その上には「天鷄（天界のニワトリ）」がいて日の出とともに世界で一番はじめに鳴く、という伝説から、此のタイプのやきものが流行します。実際に使うためではなく、副葬用の明器として数多く作られました。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4296

30. 青磁盤口六耳壺 洪州窯 南朝時代 (5~6世紀)

「高級貯蔵器」：盤（皿）形の口の下には、ふたをとめるひもを通すための輪を、肩には六個の耳を貼りつけて器の形を作っています。釉薬の成分と焼き方の影響で、黄色っぽい色

になっており、口の下などにはかけた釉薬がたまって、濃い緑色になっています。堂々とした雰囲気の大壺で、当時の青磁製品としては大きなものです。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=9205

31. 青磁碗 華北 北魏～東魏時代（6世紀前半）

「見込みと口縁に注目」：青磁の生産は、後漢時代に江南（※長江より南の地域）地域ではじまり、その後、華北（※黄河流域）に広がります。本作は地が白く釉薬は淡いので、北魏から東魏時代に華北の河南・河北省あたりで生産されたものでしょう。シンプルながら、内面にたまった釉薬や、銀の覆輪（※茶碗の口の部分を補強するために覆う、細い金属製の輪）がアクセントになっています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3944

32. 白陶長頸瓶 華北 北朝-隋時代（6世紀後半）

「釉を掛けずに驚きの白さ」：わずかに灰色がかった白色の粘土を用い、釉薬をかけずに高温で焼いた「白陶」とよばれるやきものです。形は青銅器を見本としていて、ろくろを回転させて表面を薄くけずり、細部までていねいに作っています。奈良・平安時代、仏教美術の伝来とともに日本でもこの形が作られるようになりますが、この白さは中国のやきものならではです。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=9219

33. 緑釉貼花忍冬文尊 華北 北齊～隋時代（6世紀後半）

「東西融合制作」：西方から伝わったパルメット文（※ヤシの葉文）やメダリオン（※楕円、八角形、花びら、星などの形に肖像画を組み込むなどした、立体装飾）のような文様がついた壺で、中国古代の青銅器「尊」の形をアレンジしています。中国の器の形に西方の文様がついたやきものは、青・黄・褐色などさまざまな色のものが中国各地で発見されており、当時の東西交流がやきもの作りに与えた影響の大きさを感じさせます。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=9267

34. 緑釉四耳壺 華北 隋時代（6世紀末）

「イヤリング付おしゃれ壺」：ずんぐりとしたドンダリのような形に、四つの飾り耳、胴回りの粘土紐がアクセントになった壺です。深い緑色が美しい本作は、鉛を含んだ釉薬（鉛釉）が全体に厚めにかけています。隋時代では珍しいもので、その前の北齊・北周時代から伝えられた鉛釉の技術を考えるための重要な資料です。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3800

35. 白磁碗 華北 隋時代 (6~7世紀)

「洗練された初期白磁」:化粧土(※やきものの素地の上にぬってより白く見せるための土)はぬられておらず、素材の土の色で白さを出しています。くびれのあたりまでかかった透明の釉薬がやや黄色っぽく見えており、細かな貫入(※焼いた時に表面にできるひびのような文様)が入っています。ひじょうに薄く端正な作りです。形は中国伝統のものではなく、ササン朝ペルシアのガラス碗など、西方の影響が考えられます。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4309

36. 青磁高脚杯 華北 隋時代 (6~7世紀)

「少量の酒を美しく飲む器」:エッグカップ(あるいはエッグスタンド)のような形の器で、高脚杯といいます。胴回りには二本の線が浅く刻まれ、脚部のつけ根の装飾や、底のへりを折り返すなど、細かいところにも手が加えられています。このような杯は少しの酒が薬を飲むための器で、隋の貴族の優雅な宴席を想像させます。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4306

第4章 唐時代から宋・元時代 世界に広がる中国のやきもの

唐時代、中国は東西の地域との交流が盛んになります。シルクロード(※中央アジアを横断する古代の東西交通路。中国が輸出した絹(シルク)は通った道(ロード)として名づけられた)を通して西方のものや文化が中国に入ってくることで、やきものの形やデザインにも大きく影響しました。また、技術も高まり、立体的でどっしりと厚みのあるものから、薄く繊細なものまでさまざまなものが作れるようになりました。「唐三彩」は、これまでにはなかったカラフルな色合いが特徴的で、ラクダのようなもともと中国にはいなかった動物があらわされるなど、多様化しています。当時の華やかな東西の文化交流を象徴するやきものといえるでしょう。また、唐時代後期に南東の沿岸部の「越州窯」で作られた「青磁」は、中国各地に広がると同時に、イスラーム圏や日本など世界に向けても輸出され、高い評価を得ていました。

宋時代になると、中国のやきものは技術的にも芸術的にも、大きな進化をとげます。窯の燃料がこれまでの薪から石炭へと替わったことで、より安定して高い温度で焼くことができるようになり、じょうぶで質の高いやきものが生まれました。各地に大規模なやきものの生産地があらわれ、競い合って生産された器の形、釉薬による色や雰囲気、文様の美しさが花開くのもこの時代です。宋時代のやきものは、中国の輸出品のなかでもっとも重要なものとなり、ヨーロッパや日本にも伝わって大事にされました。

唐三彩

唐三彩は、漢時代に生まれた緑や褐色の釉薬をかけたやきものが発展してできました。緑、褐色、藍色など、複数の釉薬をかけて750℃から850℃の低い温度で焼かれています。

白磁の技術が発達して、釉薬の色をきわだたせられるようになったからこそ出てきたやきものでもあります。

ほとんどが実際に使うためのものではなく、芸術的な美しさを重視した贅沢品で、貴族の墓へおさめるために大量生産されました。壺や瓶などの器だけでなく、人物や動物をあらわしたものや、枕などの生活用品も作られています。形や文様には、西方からの影響も見られます。

河南省の「鞏義窯」を中心に、650年から750年頃の約100年間に集中して生産されました。後世のカラフルなやきものに大きな影響を与えた、中国を象徴するやきものの一つです。

37. 三彩武官俑 鞏義窯 唐時代（8世紀）

「冠のマークは武官のあかし」：ヤマドリ飾りが付いた冠、厳めしい顔つき、身を守る胸当てなどから、宮廷の武官（※軍人）をあらわしていると思われます。ヤマドリは死ぬまで戦う勇猛な鳥とされ、その羽を冠につけることもありました。武官俑はしばしば文官俑（※武官以外の役人をかたどったやきもの）とペアで貴族の墓の入口両側に置かれ、墓の主人を守る明器とされました。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=9236

38. 三彩駱駝 鞏義窯 唐時代（8世紀）

「シルクロードを歩き交う砂漠の舟」：くびを上げていなくようすが、当時のシルクロードの東西交流の雰囲気を感じさせます。背中には西方に輸出された絹の荷物、その上には旅の安全を守る魔除けの獣面が見られます。ラクダは、左側の前脚・後脚と右側の前脚・後脚が交互に動く、揺れの少ない動物です。本作が実物をしっかりと観察して作られていることがわかります。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4429

39. 三彩枕 鞏義窯 唐時代（8世紀）

「枕は枕でも・・・」：褐色・緑・白の三色のやきもので、表と裏に、蓮と思われる花の形がスタンプであらわされます。「枕」は唐三彩の代表的な形で、同時代の日本にも伝わっており、奈良の大安寺でも数多く見つかりました。脈をはかるときに腕をのせる台（碗枕）、あるいは文房具や祭器の台だったと考えられています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3796

40. 三彩碗 鞏義窯 唐時代（7世紀～8世紀）

「死後の盃？」：副葬品として作られた碗で、表面に魚子文（※魚の卵のような細かい円による文様）のような文様がスタンプで押され、褐色・緑・白の三色が釉薬をかけ分けるこ

とで表現されています。本作とほぼ同じ形のものが、同時代に日本に伝わり、壺のふたとして使われていたことが、三重県の縄生廃寺の遺構の出土品からわかっています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3797

41. 三彩鍍 鞏義窯 唐時代 (8世紀)

「短い猫足香炉」：口が広くくびの短い壺に三本足がついた器を「鍍」「三足炉」とよびます。本作はろくろで作った壺に、型で成形した蹄のある獣の足をつけています。胴全体に藍色の釉薬がかけられていますが、蠟弾き（※釉薬をはじく蠟で文様を描いた上から釉薬をかける技法）による白い模様と褐色の釉薬の流し掛けで、花びらのような文様があらわされ華やかです。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3798

42. 白磁龍耳瓶 華北 唐時代 (7世紀)

「シルクロード・デザイン」：西アジアや地中海沿岸で流行した液体を入れる器アンフォラの形に、大きな二つの龍形の耳（取っ手）がつけられた、国際色豊かなデザインです。唐時代の前半期によく作られ、三彩や、褐色・緑など一色の釉薬をかけたものもあります。本作は取っ手やくびのラインが美しく、胴部の削り込みがシャープで、全体のバランスが整った優美な姿をしています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3818

43. 白磁万年壺 鞏義窯 唐時代 (7～8世紀)

「永遠への祈り」：球形に近い胴に短いくびのある白磁の壺で、透明な釉薬はやや黄色をしています。「万年壺」は、白磁だけでなく唐三彩でもよく作られた、唐時代を代表する器の一つで、中に穀物を入れて副葬品とします。墓の主人の食べ物が、あの世でも万年なくならないように、という祈りが込められています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4479

白磁と青磁

河北省の「定窯」は宋時代に大きく発展し、白い地に透明な釉薬をかけた「白磁」の中国を代表する産地となりました。線を彫ったり、文様を型押しする印花という方法で模様をつけられたやきものは格調高く、まるで艶のある象牙の彫刻のようです。

鉄の入った釉薬をかけて青みを出す「青磁」は、中国各地で生産されました。その青色は千差万別で、土や釉薬の成分の違いはもちろん、燃料（薪・石炭）の違いや時の支配者の好みなど、あらゆる条件により変化しています。南東の沿岸部の「越州窯」の青磁は、緑色の湖水のような雰囲気を持ち、最上級の色は、「秘色」と呼ばれます。同じく華南地域の「龍泉窯」の明るい青色（粉青色）はすばらしく、日本では「砧青磁」と呼ばれ珍重さ

れてきました。華北地域の「耀州窯」は、独特のオリーブグリーンの中緑を生み出しています。

44. 白磁輪花盤 定窯 北宋～金時代（11～12世紀）

「ヤバイ牙白色」：「輪花」とよばれる花をかたどった浅い盤（皿）で、ゆるやかに開く六枚の花びらの形が特徴的です。ていねいに作られた端正な製品で、ややクリームがかった「牙白色」と呼ばれる、北宋時代よりあとの時代の定窯に典型的な色合いが見られます。「牙白」は中国語で「ヤバイ（yábái）」と発音します。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=9211

45. 白磁印花蓮花文盤 定窯 北宋～金時代（11～12世紀）

「吉祥の双頭蓮を見つけられますか？」：定窯の白磁には、綴織（※絹糸を用いた織物）や金銀製の食器などの図案を印花（スタンプ）でかたどった文様があらわされました。

本作の中央には一つの茎から二つの花を咲かせるおめでたい双頭蓮がかたどられています。その周りには蓮と四弁花（※花びらが四枚の花）、そして、丸く連なる雷文の外側には、牡丹の花が繊細に表現されています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3810

46. 青磁四耳壺 越州窯 唐時代後期～五代（9～10世紀）

「世界を席卷した越州窯青磁」：本作は、大ぶりの胴部に大きく開く足（台座）がつき、肩に四つの耳がある壺で、金銀製の食器などの形をまねて作られたと考えられます。華南地域の越州窯で作られ、国内外でもてはやされた最上級の青磁「秘色」の色にせまる、質の高い製品です。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4098

47. 青磁劃花牡丹文輪花碗 越州窯 唐時代後期～五代（9～10世紀）

「花形・花文様」：文様を浅い線で彫り込む劃花（画花）技法で、牡丹の花が描かれています。中央には真上から見下ろした形が、周囲には横から見た形があらわされます。輪花や牡丹のモチーフは中国から伝わり、日本の平安時代のやきものの装飾にも大きな影響を与えた人気の文様でした。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3805

48. 青磁碗 耀州窯 北宋時代初期（10～11世紀）

「シンプル・イズ・ベスト茶碗」：華北地方の耀州窯は、華南の越州窯から影響を受け、高い技術で青磁を作りました。本作は直線的に開いた浅い碗で、文様も無くシンプルな形であるため、北宋時代のこの窯に特徴的なオリーブグリーンの中緑の美しさがきわだっています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3916

49. 青磁印花牡丹文盤 耀州窯 北宋時代（11～12世紀）

「盤面に広がる計算されたデザイン」：中央の文様が輪花の形になっており、そこに重ねて六つの牡丹の花が配置されています。空間は牡丹の葉で埋められ、周囲にはひし形の七宝文がめぐらされます。複雑な文様がほどこされた型に粘土を押し当てて創る印花技法は、質の高い製品を大量に作るだけでなく、均一な文様を美しくあらわすのにも適しています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=9209

50. 青磁蓮弁文碗 龍泉窯 南宋時代～元時代（13世紀）

「日本で流行した茶陶の碗」：胴の部分に、細長い蓮の花びらを浮き彫りで流れるようにあらわしています。日本で好まれた明るい青色の「砧青磁」の語源は、この色の名品が布を打つ道具の砧の形に似ているから、また、千利休（※安土桃山時代に、茶の湯に禅の思想を取り入れた侘茶を完成させた、千家流茶道の開祖（1522－1591））が自分の青磁のひびわれの風情に砧を打つ音のひびきをかけて、その作品を「砧」とよんだから、といわれています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3969

51. 青磁貼花蓮花文香炉 龍泉窯 南宋時代（13世紀）

「浮いている足は千鳥足」：胴部の正面と背面に、大きく開いた蓮の花と葉がつつましくあらわされた香炉です。シンプルな造形に、うっすらと白く輝く輪郭がアクセントになっています。三本足がついていますが、じつは真下に台があるので足は浮いています。この姿を千鳥が片足をあげるしぐさにたとえて「千鳥形香炉」ともよべれます。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3811

各地の窯

唐・宋時代は中国各地でやきものが盛んに作られ、特徴的な窯が数多くあらわれます。

北方遊牧民族の契丹族が中国東北部にたてた遼王朝を代表する「缸瓦窯」のやきものには、唐・宋文化の影響を受けつつも、馬に乗り遊牧生活を送る彼らの文化の特徴が見られます。

「磁州窯」は華北地域の窯で、そのやきものの多くは民衆のための日用品でした。鉄を含んだ絵具で文様を描いた上に釉薬をかけて文様を透かしたり、表面を削り落として下の地の色を出したりなど、自由な表現方法で、美しい装飾を生み出しています。

湖南省北東にある「長沙窯」は、じょうぶで実用的な器が人気で、日本・東南アジア・西アジア・エジプトにまで輸出されました。青磁をはじめ、黄釉（黄色）、褐釉（褐色）な

ど様々な色の地に、褐色や緑で異国的な文様などが描かれているのが特徴です。

江西省東北の「景德鎮窯」は北宋時代前期に、やや青みを帯びた透明感のある「青白磁」を生み出して、中国最大の磁器（※ガラス成分を含んだ土や釉薬を使って作られた、吸水性がほとんどなく、たたくと金属的な音のする硬いやきもの）の生産地となりました。白磁の一種ですが、表面は青く潤いを感じさせ、全体に透き通った美しさがあります。

52. 緑釉皮囊壺 東北部 遼時代（11世紀）

「騎馬民族の高級水筒」：10世紀に契丹人が中国にたてた遼の国で作られたやきものでもっとも特徴的なのが、「皮囊壺」です。草原の騎馬民族である彼らが、馬の鞍につけた水を入れる皮袋の形をしています。青磁の色を意識した深めの緑の釉薬が全体にかけられ、中国のやきものの技術と彼らの日常の道具のデザインが融合しています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=9232

53. 三彩牡丹文海棠形盤 缸瓦窯 遼時代（11-12世紀）

「遊牧民のゆる花デザイン」：遼で作られた遼三彩は、唐三彩をまねていますが、独特の形や色と装飾に、遊牧民でもある契丹族の風習や好みがあらわれています。緑・黄・褐色が特徴的な色は、鉛が含まれる釉薬によるものです。本作は、海棠の花に似た形の盤（皿）の内側に、型押しで牡丹が絵画のようにあらわれています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=9240

54. 白地黒掻落牡丹文梅瓶 磁州窯系 北宋時代（11～12世紀）

「白と黒のコントラスト」：口が小さく肩が張り、底がすぼまる形の器を梅瓶とよびます。本作は上下に細い花びらの文様が、胴の部分にはふくよかな牡丹の花と勢いよくのびた葉があらわれます。灰色のやきものの本体にまず白化粧（※器をより白く見せるため、白色の土をぬること）と鉄の顔料をぬり、そのあと文様の外側の部分を掻き落とすことで、下の白い地を見せています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=9248

参考1. 白地黒彩鳳凰牡丹文壺 磁州窯 北宋～南宋時代（12世紀）

アサヒグループ大山崎山荘美術館蔵

「王の壺」：白化粧をほどこした本体の上に鉄の顔料で鳳凰と牡丹を力強く描き、透明な釉薬をかけています。「百鳥の王」鳳凰と「百花の王」牡丹によって、富と高貴のイメージが強調されています。この形の壺は「酒会壺」とよばれ、明時代にかけて流行しました。

55. 黄釉緑褐彩草花文碗 長沙窯 唐時代（9世紀）

「三彩とは違うのです」：花の文様がすばやく描かれた本作は、三彩に似た緑・褐色・白の

三色ですが、「釉下彩」の技法が使われています。まず銅を含んだ緑の顔料と鉄を含んだ褐色の顔料で文様を描き、絵の上から黄色になる釉薬をかけているのです。釉薬のいたみ具合から、東南アジアあたりの沈没船から引きあげられた遺物の可能性があります。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4311

56. 黄釉褐彩貼花葡萄文水注 長沙窯 唐～五代 (9～10 世紀)

「ワインを注ぐデキャンタ?」: ずんぐりとした胴に大きな口、取っ手のある水注です。荒く面取りされた短い注ぎ口と両側面の耳の下に、ブドウ形の飾りが貼りつけられ、その上から褐色の釉薬がかけられています。前漢時代、張騫 (※武帝の命令で西域に派遣された外交官。西方の知識を中国に伝えた) が西域からブドウを持ち帰ったことをきっかけに、中国ではブドウの栽培とワインの製造が同時にはじまったようです。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3873

57. 青白磁水注 景德鎮窯 北宋時代 (11～12 世紀)

「蓋のつまみ蓋のつまみにゆるキャラ獅子」: 美しい曲線を描く注ぎ口と取っ手の付いた水注と、それをのせる承盤 (受け皿) とのセットです。ふたのつまみには獅子がコミカルにあらわされ、水注の胴部にはごく浅く彫られた唐草文様 (※花と葉のついたツタがりズミカルな曲線を描く文様) が見られます。承盤は蓮の花びらの形になっており、水注の中の酒が冷めないよう、間に湯を入れ使ったと考えられます。

58. 青白磁牡丹唐草文梅瓶 景德鎮窯 南宋時代 (12～13 世紀)

「影のように浮き立つ青」: 景德鎮窯で生産がはじまった青白磁は、文様を彫ったみぞにたままった釉薬が影のように見えることから、「影青」ともよばれます。本作は、ややデフォルメされた牡丹の花や唐草文様が全体にあらわされ、彫りの深さの違いによって浮き立つ青の陰影がアクセントになっています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4388

59. 兎毫盞 (禾目天目) 建窯 南宋時代 (12～13 世紀)

「ウサギの毛か、稲穂の先か」: 江南地域の建窯で生まれた盞 (碗) は茶を飲むのに最適な器として、日本でも「天目」という名で珍重されました。中国の天目山の寺に留学していた禅僧が、このような器を日本へ持ち帰ったことを由来とします。本作は、線状の文様がウサギの毛のようなので、「兎毫盞」とよばれます。日本では稲穂の先 (禾) ととらえ、このような茶碗を「禾目 (天目)」ともいいます。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3836

60. 玳皮盞 (鸞天目) 吉州窯 南宋時代 (12～13 世紀)

「碗内を飛ぶのは鳳と凰?」：江南地域の吉州窯は、建窯とおなじく天目茶碗の産地として知られます。本作の内側には鸞鳳文（※鸞と鳳凰の図柄。ともに中国の想像上の鳥で、鸞は鳳凰の一種。鳳凰はオス（鳳）とメス（凰）のペアとも考えられている）と小さな花があらわされていますが、黒い釉薬をかけた上に輪郭を切り抜いた剪紙（切紙）を貼り、もう一度釉薬をかけることで黒抜き文様にしています。口には銀の飾り（覆輪）がつけられています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3963

61. 澱青釉紅斑碗 鈎窯 元時代（13～14世紀）

「ワンポイントグラデーション」：明時代には鈎州にあった河南省禹県の鈎窯は、白くにごった色合いが独特な青釉磁器を生産しました。複雑な色彩の変化を見せるこの釉薬を日本では、「澱青釉」とよんでいます。本作は、とろりとした柔らかな青い碗の内側に、紫紅釉という技法で、銅を使って発色させた赤紫のワンポイントがほどこされています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4340

第5章 明・清時代のやきもの 青花・五彩と文人趣味

明時代に入ると、中国のやきものの産地は質の良い白磁を生み出す「景德鎮窯」が中心となります。宮廷で使われるやきものを作る官窯だけでなく、民衆のための製品を作る民窯でも技術が進み、清時代前期にかけて、さまざまなやきものが世界各地に輸出されました。

「青花磁器」は、明の前の元時代に景德鎮窯で生まれました。白磁の素地にコバルトで絵付けをし、その上に透明な釉薬をかけて焼きあげることで、白い地に鮮やかな青色の模様が浮かび上がります。明時代の青花は、大らかなで自由な筆さばきでありつつも、複雑な文様がぎっしりとバランスよく描かれているのが特徴です。

明時代後期に発展した「五彩磁器」は、透明な釉薬をかけた白磁に赤・緑・黄などになる釉薬で文様を描くもので、日本では「赤絵」「色絵」と呼ばれています。また、景德鎮窯の青花や五彩を写した漳州窯の製品も日本に数多くもたらされました。

つづく清時代には、さらに難しい技術によって、ごくごく小さな器に中国の文人趣味（※江戸時代の日本の知識人があこがれた、中国の風流な趣味。琴をかなで、囲碁を打ち、書画を楽しむ「琴棋書画」や、茶を飲み古典や詩を語り合うなど。）を反映した画題が描かれた青花や、繊細な筆使いでまるで絵画のように文様の描かれた五彩があらわれました。7000年以上にわたる歴史をもつ中国のやきものの技術と芸術が、ここにきわまったといえるでしょう。

参考2. 五彩龍文尊式瓶 景德鎮窯 明時代（16世紀～17世紀）

アサヒグループ大山崎山荘美術館蔵

「日本人を魅了した「萬曆赤絵」：萬曆年間（明時代後期の萬曆帝の時代（1573～1620））に作られた五彩は、日本では「萬曆赤絵」の名で鑑賞用として愛されました。志賀直哉（明治から昭和にかけて活躍した日本の小説家（1883～1971））は短編『萬曆赤繪』で、とても高価で買えなかったことを書いています。本作は、青花部分を焼いたあとに他の色をつけています。獅子の顔の形をした耳があり、五本の爪を持つ龍が鮮やかです。

62. 青花牡丹文壺 景德鎮窯 明時代後期（16～17世紀）

「ヨーロッパ貴族の部屋を飾る大壺」：直線と曲線、牡丹や水辺の図柄の組み合わせが美しい作品です。梅や雲形など、おめでたいモチーフがちりばめられています。ふたと壺の縁にはヨーロッパでつけられた銅製の飾り（覆輪）がはめられています。本作は、明時代後期にヨーロッパ向けに作られた典型的な大型壺で、サン・ディエゴ号（※スペインの大型の貿易船・軍船。1600年にフィリピンで沈没した）からも似た作品が引き上げられました。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3814

63. 青花鳳凰文梅瓶 景德鎮窯 明時代・萬曆年間（1573～1620）

「龍は皇帝、鳳凰は皇后」：大型の梅瓶で、上部に「大明萬曆年製」と書かれています。表側と反対側に大きく鳳凰があらわされていますが、自由に描かれた雰囲気から、最も文化が花開いた萬曆期の後半に作られたと考えられます。鳳凰が象徴する皇后や身分の高い女性が宮廷で用いるような、高貴な風格のやきものです。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3917

漳州窯

福建省南部の漳州窯では、景德鎮窯の青花・五彩をまねた製品が作られていました。これらは桃山時代から江戸時代初期にかけて日本に輸入され、「呉州手」（呉州は中国南方のこと）とよばれて珍重されました。

参考3. 藍釉堆花菊花文盤 漳州窯 明時代末期（17世紀）

アサヒグループ大山崎山荘美術館蔵

「藍に浮き立つ白の餅花」：藍色の地に白い釉で点や線の文様が描かれます。白い点が正月の餅花飾りにも見えるため、「餅花手」ともよばれます。

64. 五彩花鳥図盤 漳州窯 明時代末期（17世紀）

「華やかに侘びた花鳥図」：赤色が強調された装飾により、日本では「呉州赤絵」とよばれたものです。器の内側には鳥・蝶・牡丹・菊が、周囲には龍と花文様が描かれています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4513

65. 五彩人物図盤 漳州窯 明時代末期 (17 世紀)

「受験の神様」：木や花、龍にウサギが描かれています。中央にいる高貴な身なりの人物の上には北斗七星があらわされており、文章をつかさどる神「魁星」をあらわしているのと考えられます。中国では受験の神様です。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3792

景德鎮窯の青花・五彩

66. 青花芙蓉手盤 景德鎮窯 明時代後期 (16～17 世紀)

「世界に花咲く青花磁器」：花びらの形に八等分された文様が芙蓉の花に似ているため、日本でつけられた名称です。一方ヨーロッパでは、カラック船（※15 世紀のヨーロッパ大航海時代に生まれた大型の帆船）で輸入されたことから「カラック磁器」とよばれ、世界各地で人気のデザインだったことがわかります。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3809

67. 五彩花鳥図盤 景德鎮窯 清時代前期 (17～18 世紀)

「磁器に描かれた鮮やかな花鳥画」：清時代の康熙年間（※康熙帝が治めた時代。1662～1722）によく作られた五彩の典型的なものです。枝にとまる二羽の鳥を中心に、岩や草花、花に誘われた虫たちがまるで絵画のように色鮮やかにあらわされます。器の縁には、「口紅」とよばれる褐色の帯文様がほどこされています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4551

68. 五彩魚文盤 景德鎮窯 清時代前期 (17～18 世紀)

「白磁胎の海を泳ぐ五匹の魚」：一見するとゆるい絵付けのようにも見えますが、よく見ると魚の鱗まで緻密に表現され、五匹の配置も絶妙なバランスを保っています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4516

文人趣味と煎茶

日本では江戸時代に、中国の明時代の茶の飲み方である煎茶が広まります。幕末から明治・大正時代には、中国の明・清時代の茶道具が並ぶ大規模な煎茶会が、各地で開かれました。中国の端正な美意識と日本的な侘びの美意識が合わさった、日本独自の文人趣味の煎茶が流行したのです。

69. 青花烹茗図盤 景德鎮窯 清時代前期 (17 世紀)

「盤面に描かれる文人画の世界」：松の木の下、童子（※貴人の身の回りの世話をすることも）がコンロで湯をわかして入れた茶を、書を読みつつ飲む風流な人物。日本人が憧れたまさに中国文人のイメージが描かれています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4005

70. 朱泥茶銚 宜興窯 清時代末期 (19世紀)

「煎茶の主役・宜興ブランド」：特殊な技法により、質の高い製品を作ること知られる長江下流域の宜興窯の急須です。板状にした粘土を筒の形にし、たたき板でたたいて仕上げ「パンパン技法」で作られています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4112

71. 青花山羊文茗碗 景德鎮窯 清時代後期 (18世紀)

「器がしめす茶の色と味」：本作のように小さな杯を、煎茶用の茗碗といいます。ヤギは、ツノを人に向けず、また、ひざまずいて乳を飲むようすから、仁義礼（※君主が身につけるべきとされた儒教の価値観のうち、思いやり・正義・礼儀をさす）を知る従順なおめでたい動物とされました。気高かつつましい文人が使う器にふさわしい文様です。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4111

72. 青花唐子図茶心壺 景德鎮窯 清時代末期 (19世紀)

「唐子たちは何して遊ぶ？」：本作は、煎茶用の茶葉を入れる茶壺です。中国風の子どもたちが遊んでいる図柄は、家族・子孫繁栄を意味するものとして、よく使われました。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4031

73. 黒釉水注 磁州窯系 明～清時代 (16～17世紀)

「軽妙洒脱な黒水注」：本作は、煎茶の湯わかし器に水を入れるための道具です。水注は煎茶会で棚に飾られることが多く、目を引く存在です。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3850

手のひらの中国趣味

明・清時代の中国のやきものは世界を魅了しました。ヨーロッパではシノワズリ（中国趣味）と呼ばれ、日本ではとくに、手のひらにおさまる味わい深い小さなやきものが愛されます。

74. 交趾三彩鳥形合子 漳州窯 明時代後期 (17世紀前半)

「茶人に愛されたカモ」：本作のようなカモの形をした香合（※香を入れる容器）は、江戸時代の「形物香合番付（※相撲の番付表のパロディとしてつくられた香合の順位表）」にも登場しており、そのかわいらしい姿が茶人（※茶道、煎茶道を好む人）の心をつかんでいました。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3863

75. 交趾三彩菊文合子 漳州窯 明時代後期（17世紀前半）

「手のひらの菊、高貴な香り」：緑の地に紫と黄色の菊が愛らしく咲く香合で、「交趾」と名がついています。これは、ベトナム（交趾）を経由して、「交趾船」とよばれる中国船で日本に運ばれてきたことに由来します。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=3902

76. 青花向付 景德鎮窯 明末清初（17世紀）

「絵替わりで楽しむ懐石の世界」：本作はてびねりではなく、型を使って作られた三脚の皿で、茶会で出す懐石料理のため、日本から景德鎮の民窯に注文されたものです。自由なタッチで描かれ、庶民的な楽しさを感じさせるこのような器は、日本の茶人に「古染付」とよばれ好まれました。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4344

77. 豆彩花文馬上杯 景德鎮窯 清時代末期（19世紀）

「文様の中に暗号が？」：豆彩（鬩彩）とよばれるむずかしい技法で作られています。青花で文様の輪郭を描き透明な釉薬をかけて焼いたあと、輪郭の中を色で塗ってもう一度焼き付ける技法です。文様の中には、清王朝をたてた満州族の文字が隠れています。

https://jmapps.ne.jp/aitou/det.html?data_id=4038

おわりに

本展覧会に出品した作品は、当館の中国陶磁コレクションの中核をなす作品を数多く含み、リニューアルオープン後の「中国のやきもの」コーナーを構成する上で試金石ともなる展示であった。会場規模の制約などから点数を絞ることとなった⁵が、中国陶磁の通史を大まかではあるが捉えることができる構成となった。大山崎山荘の建物と調度品の意匠や、山手館における中国イメージの空間演出などにより、作品の魅力がより引き出された形となったことが、今回最大の成果であったと言える。

また、作品のキャッチコピーや解説文について、来館者層が異なることから文章レベルを大きく変えたことは、今後の当館の展示事業、教育普及事業において柔軟に対応ができるよう課題としていきたい。

注

¹ 解説文にある（※）は、実際には脚注として表記している。

² 鑑賞者の行動について、「①作品を鑑賞する。」「②キャプションを確認する。」「③解説を読む。」の3つに分けられる。①と②は多くの鑑賞者が行う行動であるが、③につい

ては作品への関心度をはじめ時間制限や鑑賞の疲労度などから、行わない、または特定の作品に限る場合が多いと考えられる。本展覧会は、特にキャッチコピーに目を通していただきたいという観点からキャプションに添えたものであり、アンケート結果からも鑑賞者からの反響が多く好評であった。

³ 「和氏」「解老」『韓非子』、「廉頗藺相如列傳」『史記』

⁴ 「鷄窓」(南朝宋・劉義慶『幽明録』)

⁵ 出品点数を絞ったことによる副産物としては、美術品輸送専用車両2トン車におさまるコンパクトな輸送量となった。